



No.180
2014.March

長岡技術科学大学 広報

新たな英知が
生まれる場所へ



自由な発想と情熱で
次の技術を語ろう。

特集

祝 卒業・修了

contents

- 02_ 学長メッセージ
- 04_ 卒業・修了を祝して
- 06_ 贈る言葉&卒業・修了にあたって
- 16_ 退職にあたって
- 21_ 全国高専めぐり
- 22_ 平成25年度 本学の主な動き
- 23_ 私の抱負
- 24_ 修士論文発表会レポート／編集後記



卒業・修了を祝して

Congratulations on your graduation.



Message

長岡技術科学大学 学長

新原 皓一

Koichi Niihara

諸君が切り拓く未来に乾杯！

学部卒業、大学院修了、誠におめでとうございます。

新しい未来への扉を開き、諸君が社会人として、大学院生として新たな一歩を踏み出されることを祝福します。

「社会の変化を先取りする“技学”を創成し、未来社会で持続的に貢献する実践的・創造的能力と奉仕の志を備えた指導的技術者を養成する、大学院に重点を置いたグローバル社会に不可欠な大学を目指します。」これはご存じのとおり、本学の理念です。皆さんにはこの理念の下、勉学と研究に励んで頂きました。新たな門出に当たり、皆さんにはこの理念を具現いただき、我が国の未来を明るくする存在として日本が抱えている様々な課題の解決に際し、重要な役割を果たされることを期待します。

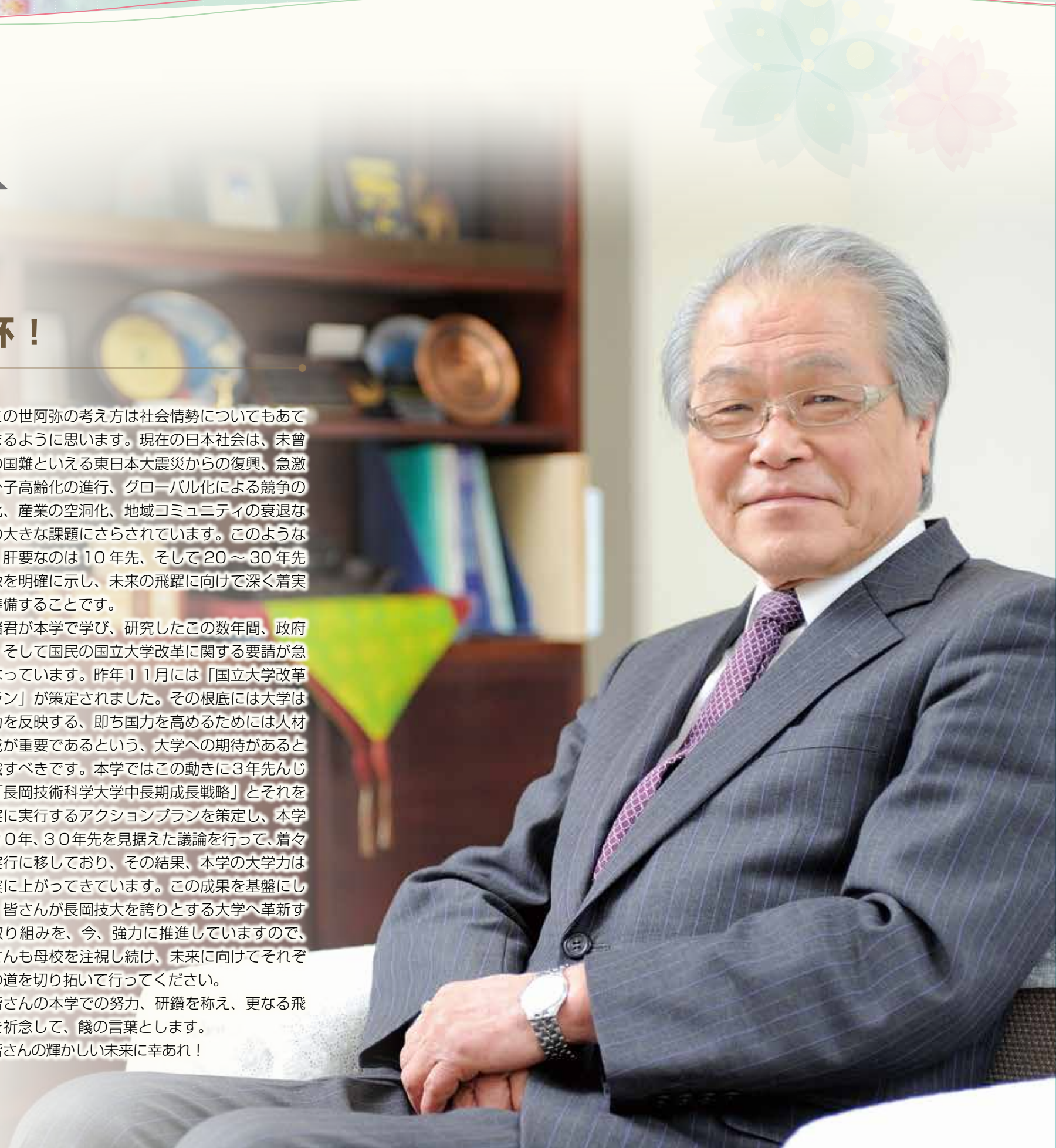
今年は、能を大成した世阿弥が誕生して650年にあたるそうです。その昔、能は「立合」といった競技形式で演じられていました。一日の勝負のうちには優勢、劣勢の波があり、果敢に挑戦する時と次の飛躍に向けて戦略を練り準備する時があるそうです。ただ、いたずらに勝ちに行っても決して勝つことはできない“タイミングの良い時”を待って、一気に勝ちに行くのが大切と説いています。また、「信あれば徳あるべし」「秘すれば花」と言い、必ず挑戦し攻める時が来ることを信じ、その時が来たら披露する一手を人知れず準備しておくべきと説いています。

この世阿弥の考え方は社会情勢についてもあてはまるように思います。現在の日本社会は、未曾有の国難といえる東日本大震災からの復興、急激な少子高齢化の進行、グローバル化による競争の激化、産業の空洞化、地域コミュニティの衰退などの大きな課題にさらされています。このような時、肝要なのは10年先、そして20～30年先の像を明確に示し、未来の飛躍に向けて深く着実に準備することです。

諸君が本学で学び、研究したこの数年間、政府の、そして国民の国立大学改革に関する要請が急になっています。昨年11月には「国立大学改革プラン」が策定されました。その根底には大学は国力を反映する、即ち国力を高めるためには人材育成が重要であるという、大学への期待があると認識すべきです。本学ではこの動きに3年先んじて「長岡技術科学大学中長期成長戦略」とそれを着実に実行するアクションプランを策定し、本学の20年、30年先を見据えた議論を行って、着々と実行に移しており、その結果、本学の大学力は着実に上がってきています。この成果を基盤にして、皆さんが長岡技大を誇りとする大学へ革新する取り組みを、今、強力に推進していますので、皆さんも母校を注視し続け、未来に向けてそれぞれの道を切り拓いて行ってください。

皆さんの本学での努力、研鑽を称え、更なる飛躍を祈念して、饒の言葉とします。

皆さんの輝かしい未来に幸あれ！





理事・副学長
(研究経営、評価、産学官・地域連携担当)

東 信彦

Nobuhiko Azuma

卒業・修了おめでとうございます

卒業・修了おめでとうございます。社会人として羽ばたかれる皆さんに心からお祝い申し上げます。皆さんはこの長岡技術科学大学でいろいろなことを学び、また多くの出会いがあったことと思います。皆さんのこれからの人生で、この長岡での学習や経験、知人・友人が大きな糧となるでしょう。是非、人との繋がりを発展させていって欲しいと思います。

さて皆さんは長岡技術科学大学で学ばれた様々な領域の専門をこれから社会で活かし、人類の幸福な未来社会を設計し、切り拓く技術科学のリーダーとして活躍が期待されています。皆さんが社会の中心的存在となっている30年後を想像し、設計してみてください。30年後のビジョンを示すことは簡単ではありません。現在我々が直面する様々な問題、課題を見つめ、これまでの歴史を振り返り、知識を広げ、想像力を働かせることが重要です。

人類は科学技術の進展により生産を増大させ、経済を発展させて来ました。もともと経済活動は、人間を飢えや病苦や長時間労働から解放す

るためのものであり、経済が発展すればするほど、ゆとりある福祉社会が実現されるはずのものでした。物質生産の持続的増大が経済的・社会的健全性の証であるとした資本主義経済により20世紀は発展してきました。その結果、企業論理や市場主義が経済的合理性を優先させ、金銭至上主義や効率万能主義が我々を駆り立て、立ち止まることを許さないほどの加速化した社会になったように思われます。とくに日本社会ではこの「ゆとりのなさ」は顕著に思われます。今の社会はより多くの人がゆとりを失い、「豊かさ」に対する思考、判断を失っているように思います。「豊かさ」とは創造的で自由な生き方が出来ることです。30年ほど前、日本が経済大国となった時に、「日本がその富を投資だけに使う限り、人間としての生活の満足感も安定も将来の繁栄も得られないだろう。それを日本シンдрロームと呼ぶ。」と言われました。その後、日本経済は停滞し、現在、再び発展に向けて、出口を見つけている状況です。

これまでの大量生産・消費文化により、資源の乱獲と環境破壊が人類の生

存を脅かす結果となりました。今後、我々は大量消費文化を見直し、生産の量ではなく、生活の質が問われ、心の豊かさを求める生活へ回帰する方向に進むでしょう。この観点での技術イノベーションが求められ、盛んになっていくと思われます。グローバルな視点で見た時、それぞれの地域、国の歴史・文化を学び、それぞれにとっての「ゆとりと豊かさ」とは何かを考える必要があります。グローバル社会の中で、真の「生活水準」を上げるための「技術科学」の貢献を考えるとときが来ているように思います。

長岡技術科学大学で学ばれた皆さんはその担い手として社会から大きく期待されています。皆さんのご活躍をお祈りします。



長岡市長

森 民夫

Tamio Mori

誇りと米百俵の精神でチャレンジを！



長岡技術科学大学を卒業、修了する皆さん、心からお祝い申し上げます。

学生時代を振り返り、長岡のどのような風景が心に残っているでしょうか。背丈ほどにもなる雪、創造的な建物のアオーレ長岡、お米や日本酒といった食もあるかもしれません。中でも、長岡まつりの大花火は、ほとんどの皆さんがご覧になったことと思います。しかしその花火に、華やかさだけではない、市民の特別な想いが込められていることをご存知でしょうか。

長岡の花火は、1,484名もの犠牲者を出した昭和20年8月1日の長岡空襲から2年後、昭和22年に再開しました。市民は犠牲者への慰霊と復興への強い決意を込めて打ち上げたのです。以後、空襲のあった翌日の2日と3日、日にちを一度も変えることなく大花火大会を開催してきました。あの中越大震災直後の平成17年中止せず、むしろ、市民の力でフェニックス花火を打ち上げ、復興への決意を全国に発信したのもその想いからです。

慰霊と復興への決意の花火。長岡を離れても、市民が花火に込めた想いを心に留めていただければ幸いです。

さて長岡は、幕末の戊辰戦争に敗れ困窮著しい中であって「まちの再興は人づくりから。食えないからこそ、人材を育てる」と教育の重要性を唱え、

見舞いとして届いた百俵の米を学校の設立資金に充てた「米百俵の精神」のまちです。これにより長岡の近代教育の基礎が築かれ、日本を担う多くの人物が輩出されました。

明治22年に乾電池を発明し、後に「乾電池王」と呼ばれた屋井先蔵もその一人です。屋井は、6歳で父と死別。叔父の家で育てられながら長岡の国漢学校に学び、多くの苦難に遭うも研究を続け、後の電子立国・日本の礎を築きました。

その功績は、120年以上の時を越えて電気・電子技術者による世界的権威の学会「電気電子学会 (IEEE)」から歴史的偉業と再認識され、今春には、出身地の長岡市に賞が贈られることになりました。

また現代の長岡には、開発途上国の

人たちの命を守る技術の開発を進めている企業もあります。これまでの水害や地震で得た経験を活かし、河川監視や災害情報提供のシステムを開発。昨年10月にはJICA（独立行政法人国際協力機構）の海外支援事業に採択され、大きな期待が寄せられています。

米百俵の精神は、長岡のいまを生きる私たちに脈々と受け継がれています。この先の人生、皆さんはさまざまな壁に直面することでしょう。そんなときこそ、長岡技術科学大学で学んだ誇りと米百俵の精神を胸に、未来を見据えてチャレンジし続けてください。必ずや道は開けるはずです。長岡に暮らした皆さんは、私たち市民の宝。今後の活躍を心から応援しています。



復興祈願花火フェニックス。今年は、中越大震災から10年という特別な想いを込めて「フェニックス10」を打ち上げます

贈る言葉

活躍への期待を込めて

機械系長 教授 古口 日出男

Hideo Koguchi

卒業、修了おめでとうございます。皆さんには大学とは違う新たな環境で、自己の更なる可能性を切磋琢磨し伸ばしていくことを期待します。何事も柔軟な心で受け入れ、自分で取捨選択することにより、自ずと活躍し易い環境を作っていけると信じています。

日本をとりまく社会は、日々変化しています。日本の社会情勢、経済情勢などもグローバルに影響を受けるようになってきています。すなわち、地球規模でものごとが影響し合い、情報は常に瞬時に伝わる社会になっています。社会に出ると身にしみてこのことを感じると思います。最先端のアイデアでさえも地球規模で見たら、同時に数人は同じことを考えています。自分のアイデアを実

現するには、あきらめない心を持つことが必要です。社会の様々な問題に対して解決する努力を継続することが求められています。努力をしていくことを通して、皆さんの人生が充実していくことと信じます。

さて、皆さんの多くは技術者・研究者になると思いますが、将来リーダーとして会社をリードする人が出てくることを期待しています。組織のリーダーとして活躍する場合、何が求められるのでしょうか。人間性でしょうか、方針にぶれが無いような特性でしょうか、先を読む頭の良さでしょうか、寛容さでしょうか。大学では経験できない内面の成長が求められるでしょう。考えてみて下さい。皆さんの今後の活躍を願っています。



贈る言葉

卒業修了おめでとう

電気系長 教授 大石 潔

Kiyoshi Ohishi

御卒業、御修了おめでとうございます。

私が工学という学問を気に入っている大きな理由のひとつに「工学は平等である」ということがあります。これはどういう意味かと言いますと「発明者が誰であろうとよいものはよい」ということです。発明者の性別、年齢、人種、宗教、学歴などには関係ありません。子どもの発明であろうと老人の発明であろうとよいものはよい。それは世の中が認めてくれます。

そこで今、私たち工学の専門家が考えるべきなのは、この「よい」ということの中身です。高度経済成長以来、私たちは、とするとより速く、より高く、より効率的なものこそを「よい」と考えてきた節があります。もちろん、それは大事であることには変わりあり

ません。しかし、スピード化や効率化の陰で、大事であるにもかかわらず、切り捨てられたり、見落とされたりしてきた物もたくさんあります。

私たちは、専門家として、それらすべてを視野に入れた「よいもの」を提案していかなければいけません。

また、先ほど私は「よいものは世の中が認めてくれる」と書きましたが、時には専門家は智恵を持って世の中の流れにストップをかけることも必要であると考えます。

ソチオリンピックでは10代の選手が活躍する中、41歳の葛西紀明選手がジャンプで銀メダルを獲得しました。皆さんも私もレジェンドを目指しましょう。

みなさんのご活躍を期待しています。



卒業・修了にあたって

技大で過ごした4年間

機械創造工学専攻 修士課程2年
大阪府立高専（現大阪府立大学高専）出身

片岡 佑太郎

Yutaro Kataoka

私は高専から本学に編入し、修士課程修了までの4年間を過ごし、様々なことを経験し、学びました。学部では耐熱材料の接合技術、修士ではレーザー加工の可視化技術について研究しました。そこでは研究にかかわる専門の知識はもちろんのこと、研究の背景を理解し、計画を立てることなどの大切さを学びました。特に、修士では学内、学外で研究発表を行う機会が多く、自分の研究成果をわかりやすく伝えることの大切さを学びました。

学部4年の2学期には本学の特徴でもある5ヶ月間のインターシップ「実務訓練」があります。私は材料メーカーの研究部で材料の試作や評価に取り組みました。学生のうちに社会人経験ができたことは自分の将来を考える上で貴重な経験になりました。

また、学業だけでなく所属していた水泳部やパテントクラブの活動でも、競泳の大会、水上安全法の講習会、技大祭のシンクロ公演、国家資格の取得などを通じて学内外の多くの方々と出会い、様々なことを経験できました。

最後になりましたが、これまで指導して下さいました先生方、また友人たちやこの4年間で出会った多くの方々のおかげで充実した大学生活となりました。4年間ありがとうございました。



▲技大祭のシンクロ公演

卒業・修了にあたって

学生生活を振り返って

電気電子情報工学専攻 修士課程2年
苫小牧高専出身

木村 慎吾

Shingo Kimura

長岡での生活も、そろそろ終わりを迎えようとしています。この4年間を振り返ると、最も印象に残っていることは岡元研（旧高田・岡元研）での研究室生活です。私の所属する研究室では研究活動だけでなく、系長杯ソフトボール大会やゴルフ大会、テニス大会など、スポーツ活動に対しても非常に活発的な研究室であり、スポーツ大会後の打ち上げでは、「お・も・て・な・し♡」精神の大切さを学びました。

研究活動では、熱心なご指導を下さった先生方や先輩のおかげで、国内学会発表のみならず、国際学会発表や論文執筆という貴重な経験がすることが出来ました。研究生活が辛いと感じるときもありましたが、今思えば、充実した学生生活

だったと思います。

最後になりましたが、ご指導いただきました先生方、支えてくださった研究室のみなさん、友人、先輩・後輩、そして家族に深く感謝致します。これからの社会人生活でも「いつ頑張るの? ... いまでしょ!!!」の姿勢で取り組んでいきたいと思っています。



▲ゴルフ大会後の打ち上げ



贈る言葉

VOSの精神で人生を拓こう

物質・材料系長 教授

野坂 芳雄

Yoshio Nosaka

学士、修士、そして博士の学位を取得した諸君、卒業・進学 おめでとうございます。卒業する諸君は新しく始まる社会生活におおいなる期待をもって卒業・修了式を迎えられたことと思います。また、進学される諸君も、卒業を自分の新たな出発点として捉え、残る学生生活を充実したものとするべく気持ちを新たにしていることでしょう。

ご存じのように、長岡技術科学大学ではVOS（活力、創造力、世のための奉仕）の精神を身につける教育を目指しています。スポーツ界では、勝敗として成果がはっきり表れます。しかし、VOSの精神がど

れだけ身についたかを測る尺度は現時点ではありません。しかし現時点で成果が実感できなくても、社会に進出し、様々な困難な事態に遭遇した時にVOSの精神を発揮することで、明るい未来が開けると確信しています。

時間はすぐに過ぎ去ります。何もなくても、時間は待ってくれません。近い目標と遠い展望をいつも持つようにして、与えられた環境の中で、受け身ではなく、積極的に行動して、個々人が自分で切り拓く悔いのない人生を送られることを、心から願っております。

贈る言葉

『志』

環境・建設系長 教授

丸山 久一

Kyuichi Maruyama

卒業、修了おめでとうございます。学生だった頃、老教授が酔いで前後不覚になりながら“若さの有り難さを知らない若者に若さを与えておくのはもったいない”と言われたことを思い出します。当時は、酔っぱらいの戯言かと聞き流していたのですが、自分がその年齢になって初めて実感しています。

若い皆さんは、経験がなく、知識や知恵も不十分で、誠に頼りないのですが、唯一あるのが“若さ”です。若さの特典は、体力があることと、なまじの常識がないことで、非常識の世界に突き進むエネルギーがあることです。

昨年9月のオリンピック招致で大活躍した佐藤真海さんは、20歳の時、骨肉腫で右足膝以下を切断し

ました。その時の絶望感は、私の理解を超えています。ただ、いろいろな方々の支えの下、ご自身の精神力と体力を基にパラリンピックで復活し、多くの人々に感動を与えるまでになっています。

本学の修了生には、企業のトップで活躍している方が多数います。彼らが入社した頃は、歴史や実績がほとんどない大学の卒業生と見られ、頼れる先輩や上司もいない状況でしたが、他人の嫌がる仕事を率先して引き受け、常識を覆す行動と成果により現在の地位を築いてきています。不利な条件が新規なものを産み出す原動力になることは多いのです。

皆さんも志を持って先輩に続くことを祈っています。

卒業・修了にあたって

修了にあたって

材料開発工学専攻 修士課程2年
茨城高専出身

掛札 さくら

Sakura Kakefuda

大学に入学してからもうすぐ4年が経とうとしています。あっという間だった大学生活を振り返ってみると、様々なことを経験できた4年間だったと思います。特に自分にとってかけがえのない経験が二つあります。

一つ目は、実務訓練です。4ヵ月間、企業で実際に働くことはとても貴重な経験でした。基礎的な知識や実験技術がとても大切だということが実感できました。また、計画性や報告の大切さも学ぶことができました。実務訓練はこれまでの自分を試し、自分に足りないものを考えさせられるとてもよい機会になりました。

二つ目は、研究室での生活です。先生やメンバーに恵まれ、とても充実した3年半を過ごすことができました。ゼミや実験だけでなく、お花見や花火、ソフトボール大会などの様々な思い出は、私にとってこれからの糧にな

るものになりました。

4月からは、道路関係の会社に就職します。研究職として化学系の学生を必要として頂きました。おそらくこれから勉強しなくてはならないことが多くあると思いますが、大学で学んだ事や経験を少しでも活かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、先生方、同級生のみんな、先輩方や後輩方に感謝いたします。皆様のおかげで充実した楽しい日々を過ごすことができました。ありがとうございました。



▲技大祭での研究室メンバー

卒業・修了にあたって

4年間を過ごして

環境システム工学専攻 修士課程2年
福井高専出身

木野 健太

Kenta Kino

高専を卒業し、技大に編入してから早いもので4年の月日が流れました。度重なる試験、長期の実務訓練、終わらない研究活動に就活と、当時は辛くもありましたが、先生方や先輩方の助けもあり、それぞれを無事に乗り越え、自らの経験として吸収することが出来ました。嫌になって投げ出したくなったこともありますが、そんな時は友人たちとお酒を飲み交わし、時に熱く、時に記憶をなくしながらも励ましあうことで、ここまでやってくることが出来ました。

また、学内だけでなく学外でも様々な人間関係を築くことが出来（お酒を通じて）、長岡でしか味わえないような体験もさせていただきました。

4月から新社会人として社会に羽ばたくこととなりますが、この4年間で培った経験は是が非でも今後の人生に活かしていきたいと思っています。

最後になりますが、この4年間支えてくださった皆様のおかげで、ここまですることが出来ました。本当にありがとうございました。



▲技大祭でのサークル活動

贈る言葉

君、志を見失うこと勿れ！

生物系長 教授 古川 清

Kiyoshi Furukawa

学部の卒業あるいは大学院の修了を祝して乾杯。昨年はNHK大河ドラマ「八重の桜」(新島八重)に魅せられ、かつて研究室旅行で訪れた鶴ヶ城と館内展示の数々のもつ歴史の重みを改めて感じました。そんな折、京都御所界隈を散策している中で、新島襄の住処(新島旧邸)に偶然行き着きました。新島襄は同志社大学創立のために奔走し、ドラマで彼の崇高な理想と実現への努力に思わず涙を誘われました。またアマースト大学留学中に、襄は学長のW・S・クラーク博士を札幌農学校の初代教頭に推薦しています。クラーク博士の専門は植物学、札幌にはわずか8ヶ月の滞在でしたが、第1期生

との別れに、あの有名な「Boys, be ambitious!」(少年よ、大志を抱け)を発せられました。19世紀末に異国の地で博士は日本の若者に未来を切り開く言葉を語りかけられましたが、この言葉のもつ力強さ(エネルギーの大きさ)に時代を越えて多くの人が心を揺り動かされたことでしょう。新島襄の住処に在りし日の姿を追いながら、襄やクラーク博士が馳せた思いをそっと肌で感じました。「日々努力を怠ると理想は消え、何も実現しません」。それは自己責任です。社会に出たら折に触れ「己の志」を確かめ、前進して欲しいものです。



贈る言葉

狭き門より入れ

経営情報系長 教授 福村 好美

Yoshimi Fukumura

ご卒業・ご修了、おめでとうございます。経営情報システム工学課程・専攻はじめ長岡技術科学大学の卒業生・修了生の皆さんが、新しい門出を迎え、技術者・研究者あるいは経営者としての第一歩を踏み出されることに對して、心よりお祝いを申し上げます。この長岡技術科学大学において修得された学術的知見と探究心、および実践に役立つ技術力・マネジメント力が今後の活動に役立ち、さらには社会の進歩に貢献することを期待しております。

社会における賢者とは、知識があることだけではなく、直面する問題の解決策を示唆できる人のことを言います。このような賢者になるためには、多くの困難に立向かい、失敗

を経験し、その中で自分の信念を確立することが重要です。「狭き門より入れ」という言葉があります。「狭き門より入れ。滅びに至る門は大きく、その道は広く、これより入るもの多し。生命にいたる門は狭く、その路は細く、これを見出すもの少なし。」(マタイ伝) 予想される困難を、恐怖心のために回避して安易に見える道を選択することなく、信念に即して進むことを推奨していると考えられます。皆さんの若い活力と豊かな創造力が、既存の枠組みを変革して、人と地球にやさしい社会の構築に向けて努力されることを期待します。



卒業・修了にあたって

新たな決意。

生物機能工学専攻 修士課程2年
八戸高専出身

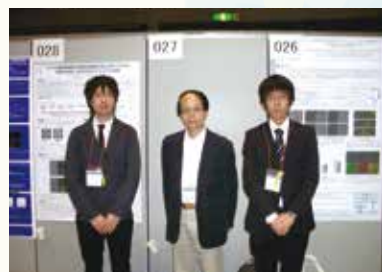
久慈 諒

Ryo Kuji

私は高専を卒業したら就職しようと考えていました。しかし、卒業間際に母から他界した祖父の入院時の様子を聞いて、病気について研究をしたいと思うようになりました。漠然とした思いでしたが、やれるところまでやってみようと長岡技術科学大学の生物機能工学課程に編入しました。高専から受験しやすく、海外からも学生や指導者が集まるということで、迷うことなくこの大学を選びました。

研究室に配属された時、教授から「地べたを這い蹲るような地道な作業の積み重ねの後に大きな喜びが待っている。とりあえずがむしゃらにやってみなさい。」と言われたことを覚えています。その後は苦勞の連続で、気の抜けない作業をひたすら繰り返し、失敗をしては再挑戦し…まるで先の見えない洞窟に迷い込

んでしまった、そんな感覚でした。その努力が実り、私の論文が雑誌に掲載され周囲から研究成果を認められた時は、自然と涙が溢れていました。この時、漠然としていた思いが決意へと変わり、博士課程へ進学することを決めました。私の研究は始まったばかりですが、この研究が未来を切り開ける技術の礎となることを信じて、さらなる研究の世界に踏み出していこうと思います。



▲ポスター発表後に撮影(2012)

卒業・修了にあたって

学生失格？

経営情報システム工学専攻 修士課程2年
新潟県立新潟商業高校出身

松原 雄己

Yuki Matsubara

恥の多い学生生活を送ってきました。自分には、普通の大学生の生活というものが見つかないのです——「人間失格」の一節を借りるなら私の学生生活はこう表現できるでしょう。

私は商業高校から本学へ進学したため入学当初は理数科目の基本的素養が圧倒的に不足していました。そのため、様々な科目で自身の無知さを痛感し、恥じました。しかし、この無知に対する恥らい(一種の劣等感)が今の自分を作り上げています。無知に対する恥、それに対する抵抗が学習の活力となりました。恥の多い学生生活だったからこそ、修士課程へ進学し、現在まで研究を続けることが出来たのだと思います。

学部3年の冬、私は研究室への配属が決まりました。研究室での生活は私に多くの刺激を与えてくれました。個性的な面々と酒を交えながら話す。ときには朝から深夜まで研究室にこも

り、研究をする。普通の大学生がこのような生活をしているのかわかりません。しかし、私には、この研究室で過ごした日々は大切な思い出であり、青春の1ページとなっています。

他の人から見れば少し歪な青春かも知れませんが、この青春は私の大切な宝物です。この青春を与えて下さった、山田研究室の皆様を始め様々な方に感謝の意を表して筆を置きたいと思います。皆様本当にありがとうございました。



▲苦楽を共にした作業用机



贈る言葉

安全の担い手として活躍する皆さんへ

システム安全系長 教授

平尾 裕司

Yuji Hirao

システム安全専攻を修了された皆さん、誠におめでとうございます。責任ある社会人としての仕事とシステム安全専攻の勉学を両立したこの2年間の多大な努力に敬意を表します。

皆さんは2年前に高い志を抱いてシステム安全専攻に入学されました。それぞれの専門は異なりますが、各自が専門とする領域のことを相互に教え合い、授業後にも情報交換を活発に行うなど非常に団結力が強い7期生の皆さんでした。授業においても、それぞれの専門知識をもとに鋭い質問、コメントがあり、理解を深めるうえで有益でしたし、私たち教員にも大いに参考になりました。

圧巻は、2年間の勉学の集大成と

もいえるプロジェクト研究の発表でした。プロジェクト研究では、授業で体系的に学んだ機械安全を中心とする安全技術・マネジメントをそれぞれの専門領域に適切に適用、展開しており、頼もしく思いました。

システム安全専攻修了生は皆さんを新たに加えて100名を超えます。安全に関係する委員会等に出席しますと、必ずといってよいほどシステム安全専攻修了生が出席、活躍しています。これからは7期生の皆さんの団結をシステム専攻および機械キャリアアップコース修了の先輩にも広げ、共に安全の担い手としてご活躍することを期待しています。

贈る言葉

第一期生を送り出すとき

原子力安全系長 教授

小川 徹

Toru Ogawa

いよいよ原子力システム安全工学専攻の第一期生を送り出すことになりました。専攻創立にあたり、学生諸君も初めてなら、教員の我々も初めてで、修論研究一つとってもまだいろいろと揃わなかった点も少なくありませんでした。その中で立派な修論をまとめあげてくれたことは大いに誇りに感じるところです。修論の研究はそれ自体としての成果も大事ですが、対象の不透明さや捉えがたさや向き合い、実験や解析を進めるなかでわずかな知識や手法を少しずつ膨らませていき、そこに問題解明の糸口、ときには大きな突破口を見出していくという、理工学の方法論を身につけていく過程でもあったはずです。その経験を基礎にすれば、このさき修論のテーマとはかけ離れた分野であっても同じように、困

難な課題に向きあっていけるでしょう。また、原子力の講義をとってくれたのは原子力システム安全工学専攻の諸君だけではありませんでした。いくつかの講義ではむしろ専攻外の多くの人たちが出席してくれました。そんな諸君も広義の一期生にあたります。下手な講義を聞いてもなかなか理解した気にはなれなかったかもしれませんが、原子力というのはまさに総合技術ですから案外なところでまた接点ができるかもしれません。原子力に限った話ではありませんが、社会に出て活動していると大学の講義で聞いた話がふと記憶のすみから出てきたりするものです。そんなとき改めて確かめたいことが出てきたら、気楽に聞きにきてくれると良いと思います。活躍を期待します。

卒業・修了にあたって

かけがえのない2年間

システム安全専攻 専門職学位課程2年

西原 岳伸

Takenobu Nishihara

社会人学生としての2年間が終わろうとしています。この2年間で素晴らしい先生方、そして最高の同期の皆さんと出会うことができ、充実した学生生活を送ることが出来ました。この場をお借りし、深く御礼申し上げます。

振り返ってみると、安全技術を体系的に学びたいという想いを抱き入学したのもつかの間、講義内容についていくことができず愕然としたこと、次から次へと出るレポート課題（いつの間にか一杯やりながらも作成できるようになりましたが…）、船堀での飲み会など懐かしく思い出されます。

同期の皆さんには安全技術だけでなく様々なことを教えていただきま

した。講義内での議論や休憩中に交わされる時事ネタなどをもとにした討議は、私にとって常に刺激的であり、問題点の捉え方、物事の考え方など大変勉強になり、私にとっての大きな財産となりました。

私は酒類製造業に勤務していますが、お客様のCSRへの関心や食品の安全安心に対するニーズは今後益々高くなるものと思われます。システム安全専攻で学んだ技術や考え方は、労働安全の向上のみならず、これらのニーズに対応していく上で必ず役立つものであると考えます。

最後に、このような機会を与えて頂いたシステム安全専攻の益々の発展を祈念しております。本当にありがとうございました。



卒業・修了にあたって

2年間の長岡生活

原子力システム安全工学専攻 修士課程2年
愛知県立安城東高校出身

安西 信幸

Nobuyuki Anzai

長岡での生活も、そろそろ終わりを迎えようとしています。私は原子力システム安全専攻の第1期生として何をするにも手さぐり状態で苦労したことを覚えています。さらに大学院からの入学ということもあり、初めは不安しかありませんでした。しかし原子力発電所の見学、学生実験を通し、交流を深めることができました。また授業内で原子力発電についてのディベートで様々な考え方を学び、個人的には日本原子力研究開発機構（JAEA）にインターンシップに行かせていただき、様々な場所で経験を積むことができました。また所属しているプラズマ力学研究室では、ソフトボール大会、フットサル大会に全力で取り組み、また学生ならではの深夜のかまくら作り、飲み会等、楽しい思い出ばかりでした。

研究活動では高輝度X線光源の分野に取り組みました。先生方、先輩方、後輩達と積極的に議論し、試行錯

誤しながら研究を進めました。その結果、国内の学会発表、国際学会にも参加させて頂きました。厳しくも充実した研究生生活を送れました。

最後にこのように充実した研究室生活を過ごせたのも先生方をはじめ先輩方、同期、後輩のおかげです。また、これまで常に私のことを理解し、応援してくれた家族には本当に助けられました。周りの方々の支えがあったことで、今の自分があることを実感しています。お世話になった方々に心から感謝し、これからの社会人生活を歩んでいきたいと思っています。



▲国際交流パーティー

贈る言葉

野心を持とう

教育開発系長 教授

稲垣 文雄

INAGAKI Fumio

この国では、野心という言葉は一般にあまり好感を持たれてこなかったようです。「彼には野心がある」という人物評は、富や権力、自己利益を得るために策謀をめぐる、どこかしら暗い、どちらかといえば負のイメージを喚起します。けれども、芸術分野などで、「野心的試み」、「野心作」という肯定的評価になります。

明治10年、8ヶ月間、札幌農学校教頭として学校の創設に尽力した W. S. クラーク博士は離職に際して、Boys, be ambitious! 「青年よ、大志を抱け」の言葉を教え子たちに残したと伝えられています。野心と違って、大志あるいは大望という語には、将来にかけの夢という明るい精神性が感じられますが、要するにどちらも ambition です。札幌農学校は有為な人材を輩出したので、この文が後世喧伝されるようになったのでしょうか、ハングリー精神を持って新しい国家建設に挑もうとする熱意にあふれた明治初期の若き精神を象徴する言葉でもあります。クラーク氏も、南北戦争を経て、大陸横断鉄道の完成により東部と西部が結ばれ、統一国家建設に邁進する若き国から来た人です。

ambition とは、人生において目標を設定し、その実現に向かって自己の能力を最大限に発揮するという決意です。今、門出にあたって、身の丈に合ったとか、そこそこのといった、現在の自分の殻から発想する安定志向は捨てて、一回り大きな野心を抱いてはどうでしょうか。人生を始める前に結果を心配しすぎるものではないと思います。

卒業・修了にあたって

技大から再出発

情報・制御工学専攻 博士後期課程3年
東京都立航空工業高専(現東京都立産業技術高専)出身

石松 純

Jun Ishimatsu

98年度に学部編入学して以来、入学式に3回出席しましたが、卒業/修了式には2回しか出てきませんでした。2005年に一度博士課程を中途退学したからです。マレーシアの教育機関に7年間勤務しておりました。長岡技大は留学生の多い大学で、意識しなくても国際的な環境で活躍できる素地が身に付きます(あくまでも素地。その後は要努力)。技大流の環境適応能力と実践能力を発揮していた私ですが、いかんせん学位未取得。行き詰まりを感じて大学に相談してみたところ、再入学という制度で、再挑戦の機会を得ました。通算4回目の技大入学、周囲は干支が一回り以上若い学生さんばかりでしたが後輩に恵まれ、また指導教員の磯部先生始め多くの皆様に多大なるご迷惑をおか

けしつともご指導を賜り博士論文を形にすることができました。修了後はまた海外で働く予定であります。そもそも私が海外に目を向けたのは留学生が多かっただけでなく、海外で実務訓練を行う機会があったからです。今後もそのように技大から海外に羽ばたく学生さんを支援できたらお世話になった長岡技大への恩返しになるのかなと考えております。



▲国際学会で現地の技大OBと
(ミャンマー、2013)

贈る言葉

むつみ会・会長 長尾 すみ子

Sumiko Nagao

ご卒業、ご修了おめでとうございます。

「こんにちは〜」と、水曜日の交流会で、むつみ会のスタッフは何度も留学生の皆さんに声をかけました。

すっかり長岡の学生生活を楽しんでいる方、緊張して表情のこわばっている方。そこで、スタッフは、紙とエンピツ、世界地図、折り紙、写真、ジェスチャー、いろいろな方法で皆さんの笑顔や日本語の数を増やしていきました。

むつみ会の活動も早いもので25年を過ぎました。バザー、ハイキング、座禅、スピーチコンテスト、バス旅行等々。みなさんの勉学や研究に直接プラスになるものは、なかったかもしれません。でも、忙しく厳しい

学生生活の中で、大勢のみなさんが参加し、日本の風土、雪国の暮らしを体験し、多くの発見もあったのではないのでしょうか？

私達は言葉が通じなくとも、何とかして分かり合おう、つながろうとしました。そして、互いに分かり合えた時は、ぱっと新しい世界が生まれた瞬間でした。

この異文化体験は、これからどんな世界に踏み出されても、異文化コミュニケーションの力を発揮する礎となるのではないのでしょうか。

「こんにちは〜」と、みなさんの眼の前の扉をあけてください。私たち、むつみ会スタッフ一同は、いつでもこの長岡の地で、皆さんを応援しています。



おめでとうございます

同窓会会長 磯部 広信

新潟県立塩沢商工高等学校教諭

Hironobu Isobe

卒業・修了される皆さん、おめでとうございます。同窓会を代表して心からお祝いを申し上げます。そして同時に、長岡技術科学大学同窓会の正会員になられたことに心からお喜び申し上げます。

さて、今年度はオリンピック・パラリンピックが開催され、感動や勇気や元気、たくさんのエネルギーをもらいました。また、「富士山」が世界文化遺産に、「和食」が日本で22件目の無形文化遺産に、相繼いで登録されました。「世界」に縁が深い一年だったように思います。

新潟県にも、世界に認められている伝統工芸があります。塩沢・小千谷が産地の「越後上布・小千谷縮」が無形文化遺産に登録されているのはご存知でしょうか。2009年、日本の染織の分野では初めてでした。千数百年前から受け継がれている麻織物で、軽くて軟らかく、爽やかな夏の着物として人気があるそうです。会津産の良質な苧麻から繊維を取り、手作業で糸にし、独特の織機で織り上げる。

一反(着物一着分の長さ。14m程)織るのに2~3ヶ月。仕上げ後に雪上に晒し漂白し、縞模様をくっきりと浮き立たせる。この地方に降る雪が麻にちょうど良い湿度を与え、天然の漂白作用で織物を美しくします。

開学当初から5年ほど、技大の学位記カバーには小千谷縮が使用されていたそうです。同時に、学位記の用紙は長岡市小国町で生産されている小国和紙でした。小国和紙も原料の楮皮を雪晒しで漂白し、伝統的な技法で手漉きされている和紙です。技大と地元の伝統工芸、両極にあるようで、実は縁が深いのです。

時には牙をむいて害を与える雪ですが、雪があることで、産業が豊かになることも多くあります。新潟県のこのような文化にも、ぜひ、興味を持っていただこう願っています。

技大での研究は最先端技術。それを進めていくためには、工芸作品同様、細かな作業や地道な実験の繰り返しが必要



です。最先端の舞台に立っても、自分の根本となるものを忘れずに。時には、その技術を郷土の風物を守るために役立ててください。疲れたら、母校を第二の故郷として心を休めに帰ってきてください。

母校での、新潟県での体験が皆さんの今後に生かされ、より充実した人生を送ることができますよう、心よりお祈り申し上げます。

感謝と未来に

理事・事務局長

宮崎 一之

Kazuyuki Miyazaki



平成21年8月、本学着任時の長岡まつりの民踊流し、天地人、フェニックス、正三尺玉の大花火に感動し、豊かな自然、四季の変化を感じながら過ごした4年半でしたが、日々、教職員の皆様のご協力、ご支援を頂き、無事、退職を迎える事ができましたことを深く感謝申し上げます。心より御礼を申し上げます。

着任、一ヶ月後には政権が交代し、行政刷新会議による事業仕分けにより運営費交付金の見直し、事業の廃止・縮減が行われました。そのような状況下、新原学長には関係国会議員へ国立大学の現状と財政支援の必要性、本学の教育研究の取組についてご理解いただくため、幾度となくご説明いただいたこと、また、これまで先生方には文科省へ改革事業、プロジェクト事業等の要求説明

に足を運んで頂きましたこと、感謝の気持ちで一杯です。

我が国は世界に類を見ない少子高齢化、一千兆円を超える債務残高の危機的國家財政、激変する世界経済において、産業競争力の強化なくして再生がなし得ないところであり、「大学力」は国力であるとされ、国立大学は社会的期待に応えるための機能強化の取り組みにより、高い付加価値を生み出すために進化することを強く求められています。

教職員の皆様のご活躍により、本学の強み、特徴を生かし本学の理念である持続的未來社会の構築に貢献する創造性豊かな人材育成、急変するグローバル社会における新たな日本の産業基盤を担う大学、存在感のある大学として更なる発展をされますことを心より祈念致します。

退職にあたって

電気系 教授

上林 利生

Toshio Kambayashi



私が本学に着任したのは昭和54年（1979）で、2期生の学生が入学してきた年ですから35年勤めたこととなります。当時は第2次越冬隊と呼ばれていました。右も左もわからずに右往左往し、先輩の先生方のいわれるまま学生実験を立ち上げたり、電気2号棟の部屋割りや、部屋名をつけたりしていましたが、これから発展してゆく組織特有の何ともいえない熱気に包まれていたのを懐かしく思い出します。学生実験では、当時まだ市販されていなかった光ファイバーや半導体レーザーなどをつてを頼りに電電公社（日本電信電話株式会社の前身）の研究所や東京工業大学からもらってきて実験テーマとし、これは日本で（おそらく世界でも）初めての学生実験であると自負していたものです。

長岡ですから雪が多いのは覚悟していたのですが、何年目かの冬に大雪で、普通の家から雪下ろしをするのはともかく電気の建物（ビル6階建て）などからも雪下ろしをしたのには心底驚きました。それから英国の2年間の生活で大きなカルチャーショックを受けたり、フォトリソグラフィ結晶との出会いがあり、中越地震、東日本大震災など様々な出来事があったり、ふと気がつくと周りには就任当時学生であった先生方が大勢おられるなど環境が大きく変わっていて月日の経つ早さに呆然としています。

最後になりましたが、本学の教職員の皆様には大変お世話になり有り難うございました。本学のますますの発展をお祈り申し上げます。

退職にあたって

機械系 教授

福澤 康

Yasushi Fukuzawa



早いもので、長岡技大に奉職してから約35年が経っています。当時は、新幹線の駅はもちろん関越道もなく東京からは、特急で3時間半、車で8時間位かかる今では想定できないような所でした。大学院の指導教員であった中村正久先生が長岡でも研究室の教授であったので、大学院の学生生活とはあまり変わらない状態で長岡での生活が開始しました。

修士の学生が研究室にやってきた翌年から長岡での教育・研究生活は始まりました。AE、金属-セラミックスの異材接合、微小重力下での濡れ性評価、板紙の切断、放電加工等を行ってきています。1985-1987年にドイツ（当時は西ドイツ）シュトゥットガルトのMax-Planck研究所、Petzow先生のところで接合の研究をおこない、金属材料からセ

ラミックス材料へとテーマは広がりました。ドイツで当時豊田工大の毛利先生との出会いから放電加工の研究が始まり現在に至っています。微小重力の研究は、大学院の友人からの依頼から始まり、航空機を用いた実験では微小重力を約2分間経験しています。紙類の研究は永澤先生との雑談から始まった研究であります。こう述べてくると、あまり先を見て研究テーマを決めてきたとは思えませんが、研究室の学生さんも含めて人との巡り合いが私の研究生生活を支配していたように思えます。

JABEE、FD、アドバンストコースと教育関係の仕事にも関わってきていますが、今後も継続して実施していかなければならない事項であるので、さらなる展開を期待しています。

年年歳歳花相似

環境・建設系 教授

丸山 久一

Kyuichi Maruyama



今年もまた桜の季節がやってきます。本学に赴任して35年。私も数々の先輩たちの気持ちが分かる時を迎えることとなりました。長い間、多くの方々のお世話になって、ここまできることができたことに感謝の思いで一杯です。

1979年2月1日に辞令を頂き、現物質・材料経営情報棟の4階の部屋に落ち着いて、窓から見た風景とその時の感激は今でも忘れません。4月から授業を受け持ちましたが、試行錯誤の連続でした。1期生はまだ4年生でしたが、歳の差がないこともあり、学生から遣り込められたこともありました。

実務訓練は初めての試みで、先輩の先生方は訓練先の了解を得るのに大変苦労されたようでした。幸い、上越新幹線や関越・北陸自動車道の

建設が最盛期で、受入れ先を確保でき、私も指導教官としていろいろな現場を見学させて頂きました。

悲しい出来事もありました。学生が事故で亡くなることがあり、また、自ら命を絶つ現場にも直面しました。自らの未熟さに歯噛みをする思いに駆られたこともありました。

恩師の言葉で、「大学はそこに集う人々が成長する場である」を心に刻んでいます。いつも後で気がつくのですが、折々に多くの人々の支えにより、いつの間にか想定を超える結果を得ていることがしばしばありました。その意味では、長岡技術科学大学は私を十分に成長させてくれた場であると思っており、心から感謝しております。

皆様のより一層のご発展をお祈りいたします。

技大での思い出

教育開発系 教授 村山 康雄

Yasuo Murayama



本学に赴任して13年が過ぎ、この3月で定年退職を迎えます。あっという間でした。もともと科学には興味があり、最初の勤務先は高専、次（前任校）は文科系の大学でしたがコンピュータ関連の学科があり、私は同僚の助けを借り、パソコンを組み立てたこともあります。そのようなわけで、本学での活動にも全く違和感を感じず過ごしました。

本学の勤務での思い出といえば、海外語学研修（オーストラリア）、科研の仕事で海外に行き貴重な経験をさせてもらったことです。海外語学研修では研修先でのクラス配属に納得できなかった学生のために担当者と交渉し、クラスを変えてもらったこともありました。

科研では科学実験を英語で表現するという題目の元、海外、国内の大学、高校に見学に行きました。その中で私にとって最も身近に感じ、興味を惹か

れたのは、東京のインターナショナルスクールでの授業でした。生徒がピーカーについている指紋を検出、照合するというものでした。それは、まるでドラマ「科捜研の女」の世界が目の前で繰り広げられているようで感動しました。Forensic Science for High School（「高校用法医科学（科学捜査）」）という本までありました。

様々、思い出は尽きませんが、皆様には大変お世話になりました。長岡技術科学大学の更なるご発展を祈念しております。



▲メルボルン市街

定年を迎えて

総務部 施設管理課長 中川 博文

Hirofumi Nakagawa



公務員および国立大学法人での最後の3年間を長岡技術科学大学で勤めさせて頂きました。約40年前に新潟大学で公務員生活を始め、当時の長岡市学校町の新潟大学工学部で木造校舎改修工事の設計図をひいたことが思い出されます。その新採用時2年間の直属の上司が渋谷政利係長でした。その後、渋谷さんは文部省に転勤され長岡技術科学大学開学時の施設課長を務められキャンパスマスタープランを作成し開学の礎を築いたと伺っています。上富岡町キャンパスの基本構想である周回道路を配置し物流は外周からアクセスし中央をキャンパスロードの歩行者専用とし緑の多い理想的な大学キャンパスだと思っています。

渋谷さんから新潟大学に在籍していた時に教えて頂いたことの一つに硬式テニスがあります。新潟大学事務局の北側に隣接してクレーテニスコートがあり、春

先にローラーかけの整備を行い4、5人で昼休みに練習をしていました。

その後、渋谷さんは宇宙研を皮切りに九州大学施設部長で退官するまでの15年間公務員生活を送られました。その間、何回か私が転勤先の大学に押しかけて行ったり、渋谷さんが新潟に帰省した際には何回か古町に呼び出され飲みに行った記憶があります。私が長岡技術科学大学に着任した平成23年の秋に私に会いに来てくれて非常に懐かしく思いました。

最後に昼休みにテニスの相手をして頂いた匠陵テニスクラブの先生方、本当に有難うございました。今、記憶をたどると昼休みテニスの練習試合の印象が鮮明に思い出されます。出来れば週末などにまたテニスの相手をして頂けたらと思っています。

本学のご発展と皆様のご健康、ご活躍をお祈り申し上げます。

日本の生活を振り返って

経営情報系 准教授 マクガウン・ヴァレリー

Valerie McGown



私が初めて日本に来た1970年代は、日本が第二の経済国になり、大阪万博を経て日本の製品が世界中に広がり始め、貿易摩擦も始まっていた。もうすでに「国際化」が大きな課題になっていた。高度成長期の真盛りにオイルショックが起きたが、他の先進国がスタグフレーションに陥っていくのと対照的に、日本経済は早く復興し、さらに力をつけ、輸出を伸ばし、貿易摩擦が深刻化していく中で、Japan as No.1が国内外で話題になった。

このとき、東京大学大学院社会学科では私はただ一人の留学生、ただ一人の女性で、国際課も学生支援もない時代であった。アパートの近所に外国人は一人もいない、近所の人や子供たちにとって「外人」が珍しくて、少し怖い存在であった。その半面、この時代の学生や先生たち、友人たちは日本の将来や外国・国際社会に対する関心が高かった。また、この時期、日本人学生の留学がピークであった。

それからほぼ40年がたち、2010年代になって何が変わったかといえば、とりあえず「国際化」が「グローバル化」に変わった。安倍政権が発足し、グローバル化がますます重要課題とされている。確かに数年間、生活

の拠点を外国に置く日本人が少しずつ増えている。また、留学生も含めて、日本に住んでいる外国人が大幅に増えたが、まだ大都市に集中している。日本の大学や企業に努めている外国人をさらに増やすことももちろんだが、その受け入れ体制はまだ不十分である。例えば、年金制度と介護保険が外国人にとってとても不利になっている。

また、40年がたった今も、日本人の英語力があまり伸びていない。それだけではなく、「英語ができなくても就職にも生活にも困らない」と思っている学生が少なくない。もう一つ懸念すべきことは、今の若い世代の外国・国際社会への関心が70年代に比べ、薄くなっているように見えることである。外国留学が1970年代のピークの3分の2まで減ってしまい、学生の視野が国内どころか、自分の生活範囲・行動範囲にまで狭められている。いくら安倍首相が各国を回って日本の存在やその国際社会における役割をアピールしようとしても、若い世代が自分の国の将来について熱心に考えるようにならないければ、グローバル化はスローガンで終わってしまうであろう。

定年を迎えて

学務部 入試課長 泉 敏彦

Toshihiko Izumi



昭和55年11月、1期生が大学院修士課程1学年に学年進行している年に、電気通信大学から転任してきて以来33年余り本学でお世話になり、この3月で定年を迎えました。

この間に担当した業務を、現在の事務局の各課に当てはめると、総務課、財務課、学務課、学生支援課、入試課及び国際課となり、事務局の半分以上の課を経験したことになります。

また、最後の5年間は入試課長として、入試業務と入試広報業務を担当しました。

入試業務では先生方の協力を得て、出題ミス防止策として新たに問題点検制度を創設することができました。また、入試広報業務で

は県内外の高校の進路指導室訪問や、高校側の依頼による大学説明会への参加、本学を訪ねてこられた高校の先生方に本学の特色を説明しました。入試広報業務を進める中で、毎年印象に残る先生や生徒があり、その方々との出会いが受験や入学に繋がることが、仕事のやりがいになりました。

今日この日を無事に迎えられたことは、多くの方々のご指導、ご協力があったからであり、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

4月からは再雇用職員として引き続き勤務させていただき、微力ながら本学のお役に立てよう頑張りたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

退職にあたって

退職を迎えるにあたって

総務部 財務課副課長 金山 勝春

Katsuharu Kanayama



昭和47年4月に第一期生と共に長岡技術科学大学に着任して以来、丸36年間にわたって勤めさせていただき定年退職を迎えることとなりました。36年間という長い間、学内外で色々なことがありましたが、過ぎ去ってみますとあっけない気がします。着任当時は、まさに建築現場、富岡という岡を切り崩し、みるみるビルと化してゆく大学構内でした。中庭、駐車場の整備は相当な年月が過ぎてからでした。その間、田んぼみたいな通路に駐車しており、数カ月後にはその駐車場所も工事に伴い、別の田んぼの中に駐車する状態であり、週末は必ず洗車をしていた気がしています。

また、着任した翌昭和54年1月

には第1回大学共通第1次学力試験が開始された。

日々の生活に追われ、あっという間に定年を迎えたというのが正直な気持ちであり、勤め上げた喜びを感じています。

今日まで大過なく勤務できたのも、多くの先生方、良き上司、先輩、同僚そして後輩と出会い、ご指導・ご協力をいただき支えられながら、ここまでたどり着いたという感謝の気持ちで一杯です。最後にこの場をお借りしてお礼を申し上げるとともに、大学と皆様のますますのご発展とご活躍・ご健勝をお祈りいたします。

定年にあたって

技術支援センター 技術専門職員 相田 久夫

Hisao Aida



▲修了記念写真の前で

昭和63年に教室系技術職員として採用されました。配属先は建設系の都市計画研究室です。人に声をかけることが苦手な私に1人の学生さんがソフトボールに誘ってくれたことがきっかけで話ができるようになり有難かったことを覚えています。

研究室では松本先生よりコンピュータの管理を任されました。当研究室においてコンピュータは大変重要なアイテムであります。中出先生はじめ研究室の諸先生方には多々教えて頂きました。その頃のOSはMS-DOSを使っており設定が難しいものもあり他の研究室にもよく相談に行きました。毎年1月くらいから学生の論文作成が佳境に入ると人を見ているかのようにパソコンの調子が悪くなり学生も私も緊張させられたこと

を思い出します。

平成8年にはまだ使用者の少なかった地理情報システムが研究室で導入され、操作やデータ作成等に取り組みました。現在では都市計画はもとより防災計画や災害時にはなくてはならないものとなり導入時から関わらせていただいたことに感謝しております。

また、3年前には技術支援センターが発足。一員としてイベントへの参加等今までにない経験をさせていただきました。

諸先生方、事務局の皆様、技術職員の皆様のおかげで定年を迎えることができましたことに大変感謝致しております。最後に長岡技術科学大学の益々の発展を祈念し、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

シリーズ 全国高専めぐり

第十一回 函館工業高等専門学校

技術の高度化と国際化へ対応する「函館高専」の取り組み

函館工業高等専門学校 校長 岩熊 敏夫
Toshio Iwakuma

函館高専は道南唯一の総合的な工学系高等教育機関として地域と共に歩んで来ました。

本校では、自ら積極的に考え、自主的にテーマに取り組む創造教育科目を低学年より展開してきました。その成果は、体験入学や高専祭などで展示・実演され、受験生や市民に好評を得ています。また、専攻科では、チームで地域ニーズ課題に取り組むPBL授業を早くから実施し、実用的な成果品を地域に提供してきました。キャリア教育にも力を入れ、本校が開発した進路情報検索システムは他高専にも導入されています。

函館高専は創立50年を期に、融合技術と国際化へ対応するための教育改革に取り組んでいます。

平成25年度に機械・電気電子・情報の3学科を生産システム工学科に統合し、物質工学科を物質環境工学科へ、環境都市工学科を社会基盤工学科へ再編しました。新学科1学年は混合学級で工学の基礎を学び、2、3学年では3学科5コースに別れて専門性を培い、4、5学年では10履修コースに配属され専門性を

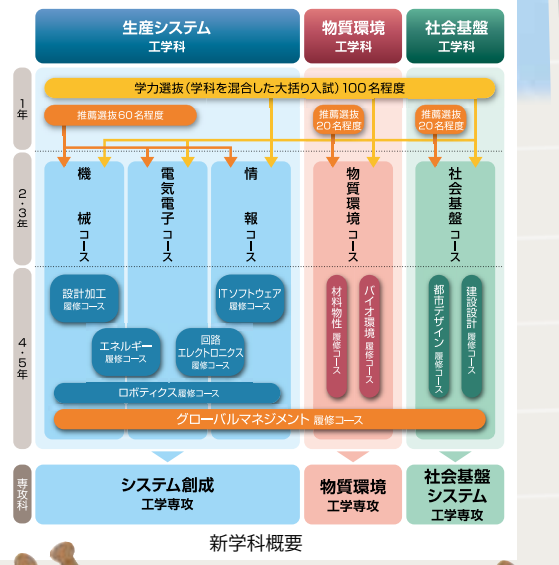
深め、高度な融合分野の工学的素養を身に付けます。分野横断型のグローバルマネジメント履修コースでは、将来は技術者や研究者として国際社会に貢献できる人材を育成します。

分野別の到達目標であるモデル・コアカリキュラムと評価指標であるルーブリックを全国高専に先駆けて導入しました。さらに、卒業までに備えるべき基礎能力、専門能力、分野横断的能力の到達度を評価し質保証を行う取り組みを進めています。

函館高専 URL
<http://www2.hakodate-ct.ac.jp/>



PBL 製作品「眼鏡型函館山夜景ビューワー」を試すタイ教育相



ウェブベースの進路情報検索システム

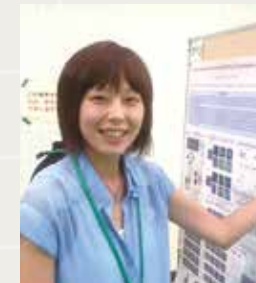
函館高専から長岡技大へ

充実した学生生活を！

中学生の時から理科が大好きでした。“もっと学びたい・もっと知りたい”と函館高専の物質工学科に入学し、材料分野から生物分野まで幅広く学びました。そこで生物分野について興味をもち、長岡技術科学大学の生物機能工学課程に入学を決めました。最初は生物分野を深く学んでいない自分が大学の勉学についていけるか不安もありましたが、基礎から丁寧に生物分野を学ぶことができ、不安もすぐに消えました。また最先端の技術や知見に携わることで“もっと学びたい・もっと知りたい”という探究心や向上心を持ち続けることができ、自分自身の成長にも繋がりました。

勉学以外にもサークル活動や実務訓練など貴重な経験に大学生活は満ちています。

長岡技術科学大学で充実した学校生活を送ってみませんか？



生物機能工学専攻
修士課程 2年

小荒 ユキ子

Yukiko Koara

函館高専

物質工学科

平成22年3月卒業



▲サークル仲間との一枚

平成25年度 本学の主な動き

平成25年

- 4月5日 平成25年度学部入学式並びに大学院入学式
(学部475名、修士課程451名、博士課程24名、専門職学位課程10名)
- 4月13、14、20、21日 技大桜散策祭
- 5月24日 名誉教授懇談会
- 6月9日 本学ロボコンプロジェクトが、大学ロボコン2013で
2年連続ベスト4～技術賞、特別賞を受賞～
- 6月21～23日 第2回国際技学カンファレンスin長岡
(The 2nd International GIGAKU Conference in Nagaoka)
- 8月4日 2013オープンキャンパス
- 8月5日 燕三条地場産業振興センターと包括的連携協定締結
- 9月10日 長岡商工会議所と包括的連携協定締結
- 9月14日、15日 第33回技大祭
- 9月28日 本学同窓会が、第2回開学記念マラソン大会
- 10月11日 実務訓練開始
- 10月17日 技術科学大学と高専機構が連携・協働した教育改革シン
ポジウム「グローバル化時代に求められる実践的技術者
像」(以下「三機関シンポジウム」)
- 10月31日 南魚沼市と包括的連携に関する協定締結
- 10月31日 湯沢町・湯沢町商工会と包括的連携に関する協定締結
- 11月21日 本学卒業生のロブサンニャム ガントゥムル モンゴル国
教育科学大臣一行が本学を訪問
- 11月28日 エリアワンセグ放送開始

平成26年

- 2月7日、8日 技学イノベーション推進センターキックオフミーティング
- 2月18日 株式会社遠藤製作所と包括的連携協定締結
- 3月25日 平成25年度学部卒業式・大学院修了式



入学式



国際技学カンファレンスin長岡



オープンキャンパス



技大祭



三機関シンポジウム



ガントゥムル モンゴル国大臣来訪

平成25年度 卒業・修了者数

工学部	卒業生数	大学院工学研究科 修士課程	修了者数	大学院工学研究科 博士後期課程	修了者数
機械創造工学課程	103	機械創造工学専攻	110	情報・制御工学専攻	9
電気電子情報工学課程	109	電気電子情報工学専攻	112	材料工学専攻	7
材料開発工学課程	59	材料開発工学専攻	48	エネルギー・環境工学専攻	15
建設工学課程	52	建設工学専攻	36	生物統合工学専攻	8
環境システム工学課程	47	環境システム工学専攻	34	計	39
生物機能工学課程	44	生物機能工学専攻	45	大学院技術経営研究科 専門職学位課程	修了者数
経営情報システム工学課程	33	経営情報システム工学専攻	22	システム安全専攻	15
—	—	原子力システム安全工学専攻	14	計	15
計	447	計	421	合計	922
※年度途中卒業・修了者も含む				論文提出により学位を授与された者	4

任期満了で帰任される先生方（高専一技科大教員交流）

平成25年度の高専・両技科大間教員交流制度で本学に赴任されている 電気系 和田州平教授(木更津高専)、機械系 佐々木徹准教授(長岡高専)、電気系 阿蘇司准教授(富山高専)、物質・材料系 石塚眞治准教授(秋田高専)が3月末に任期を終えられることになりました。

この制度は、高専と技科大の教員を互いに一定期間派遣し、教育及び研究の向上を図るとともに、高専と技科大の連携強化を通じた、全体の活性化と人事の流動性の確保を目的に行われています。先生方におかれましては交流期間中の長岡技大の教員としての任務を十分に果たして頂きました。

高専に戻られた後も、ますますのご活躍を祈念いたします。



和田州平教授



佐々木徹准教授



阿蘇司准教授



石塚眞治准教授

私の抱負

液晶による電磁波の制御を目指して

産学融合トップランナー養成センター
産学融合特任准教授

佐々木 友之

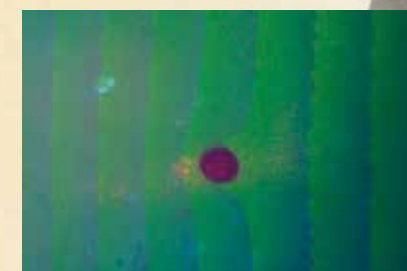
Tomoyuki Sasaki

平成25年12月1日付で、産学融合トップランナー養成センター産学融合特任准教授として着任いたしました。専門は応用光学、ときには光エレクトロニクス、場合によってはフォトリソグラフィなど光を取り扱う分野です。一方で、液晶の研究をしていると説明することもあります。

液晶は、テレビをはじめとする表示デバイスに用いられていることから、言葉としては広く知られておりますが、その性質には謎が多く、不思議で魅力的な材料です。液晶は分子により構成されており、その配列を操作することで、液晶を介した光の制御が実現されます。私は、微細領域における液晶の多次元配向分布が、光の有する多様なパラメータの複合的かつ高度な制御を可能にすることを見出し、液晶を用いた高機

能光デバイスを開発すべく、これまでに研究を進めてきました。そういった中で、液晶の応用は光領域に限定されるべきものではないとの思いに至り、今後は、液晶を用いたより広い周波数領域での電磁波制御技術の確立を目指す考えであります。

本学の発展に少しでも貢献できるよう、精一杯努力する所存です。ご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



▲液晶の配向が光照射により歪む様子

修士論文発表会レポート

—原子力システム安全工学専攻 2月18日(火)—

2月18日(火)に原子力システム安全工学専攻の修士論文発表会が本学B講義室にて開催されました。原子力システム安全工学専攻は、平成24年にできた新しい専攻で、今回が初めての修論発表会です。14名の学生が発表し、その内社会人大学院生が1名、2名が博士進学が決まっており、11名の就職内定が決まっており、全員の進路が確定しております。

原子力発電未導入国に対するポテンシャル
指標の開発～需要・技術・政策からの総合評価～



質問に答える土田佳裕君
日本原子力研究開発機構に内定

ゼオライト基礎特性把握に基づく
ガラス廃棄体化方策の検討



社会人大学院生の工藤勇君(アドバンエイジ株式会社)の発表。会社での仕事がある中で大学院での講義に参加し、研究内容も優れたものでした。

慣性核融合燃料標的の評価に向けた電子ビーム
ダイオードによる投入エネルギー制御の検討



発表する林亮太君
博士課程進学予定



修士論文発表会では会場からの質問も活発に行われました。

編集後記

この編集後記を書いているのはソチオリンピックの閉会式の直後で、選手たちの晴れ晴れとした表情が印象的でした。修論の発表を終えた学生たちの顔と被ってしまった教員は私だけでしょうか。さて、卒業生の諸君たちは、これから社会に羽ばたいて行くわけですが、社会の海は順風だけでなく、風の時もあれば荒波のときもあります。しかし、本学で技学を習得した君たちは十分にこの社会の海を渡っていけるだけの技と力を持っています。君たちの未来は明るい。

VOSの由来 本学のモットーである、Vitality, Originality, Servicesの頭文字をとって、本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。



VOS NO.180 [平成26年3月号]
編集発行 長岡技術科学大学広報委員会

◎本誌に対するご意見等は下記までお寄せ下さい。

〒940-2188 新潟県長岡市上富岡町1603-1
TEL. 0258-47-9209 FAX. 0258-47-9010(企画・広報室)
E-mail: skoho@jcom.nagaokaut.ac.jp URL: http://www.nagaokaut.ac.jp/

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。